

水と文学

(2)



前東京都水道局理事 小泉 智和

もう8年になります。

平成7年1月17日未明、阪神・淡路を中心M7.2の大地震が発生し、6,432名の人が亡くなり、水道を始め道路、建物等が壊滅的な被害を受けました。

そんな阪神・淡路大震災のことにつれて書かれた小説が黒岩重吾の作品にあります。

「雨毒」（講談社刊）の中の“病花の舞”は、こんな書き出しで始まります。

「西宮の高台に住む作家の私も阪神大震災の被害を受けた。家屋は部分的な損滅で済んだが、家財はかなり損失した。

参ったのは、日常生活を完全に狂わされたことである。飲み水や食料などは編集者を含め大勢の人たちが選んでくれた。

ただ長期間、水とガスが止まったので風呂に入れない。貴重な飲み水で体を拭くわけにはゆかない。湯を使う際は大阪のホテルに泊まりに行った。また時には近くの湧き水場で水を汲んだ。だが足の悪い私には水の入った重いポリバケツを提げて歩けない。水を運ぶのは妻ということになる。妻は小柄である。身が不自由なことの無念さをこの時ほど痛感した

ことはなかった。

大震災は同じ被災者でも、老齢者や身体障害者により深い傷を負わせた。

私が比較的早く立ち直ったのは、連載小説をかかえていたため、精神面での緊張感を持続できたからである。

地震の後、様々な人達から見舞状や電話を貰ったが、結構励みになった」

“病花の舞”は、震災のあった年の「オール讀物」8月号に載ったもので、話は、この後手紙をよこした一人の女性と出会うことによって、金の無心を受けるところとなります。そして、会ったことの愚かさから、反吐を吐くほどの自己嫌悪に陥っていくと言う話です。

歴史小説家の彼が、現代小説を書く時は、ある面では現代社会からはみ出した人間の愛欲や悲恋を描く事が多いのを特徴としています。

●黒岩重吾の履歴書

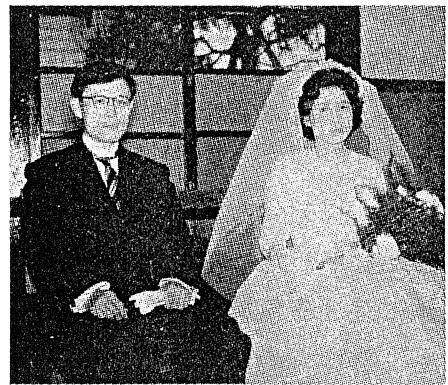
“病花の舞”を書き終えた10月、日本経済新聞社に「私の履歴書」が1ヶ月に渡って掲載されました。それを簡単に記しておきましょう。

重吾は、大正13年（1924）生まれですから今年で79歳になります。大阪の安治川六軒町で生まれますが、小さい時は腺病質で、小学校の一時期虚弱児童を鍛えなおす学園に入っています。中学浪人をして、奈良県立宇陀中学校（5年制）に補欠入学し、長谷寺、桜井に下宿先を求めていました。彼は、「もし私が宇陀中学校に入らなかったら、古代史小説を書くようになったかどうか疑問である」と、記しています。

中学時代は素行がかなり悪く、教師達の間で評判になっていたらしいのです。そんな彼も同志社大学に入学、学徒動員で満州へ、戻って油を扱う闇屋になります。

卒業後証券会社に勤務、株高に乗り“あぶく銭”を得て成金気分、しかし脊髄灰白質髄炎で4年間入院、株価も暴落、膨大な借金を抱え親の家さえ売ることになります。そして、全財産を失い釜が崎に逃げ込みます。そんな浮き沈みの激しい時に、彼は作家になる夢を触発されます。

証券会社の時に、「週刊朝日」の記録文学に応募、佳作入選。続けて「文学界」の新人原稿にも応募、佳作（今日の新人賞）。入院中に書いた作品が「サンデー毎日」の懸賞小説にも入選しています。原稿料が少し入るようになり、旅館（ドヤ）を出てアパートに住むようになります。



黒岩重吾氏

●水産業新聞の初代編集長となる

その後、彼は宗右衛門町のナイトクラブミナミの宣伝文案要員になります。無名作家で、仕事が夜だけということで、求婚できずいる毎日、二、三の業界紙に応募し、出社しますがいずれも半月足らずで辞めてしまいます。そんな折、昭和33年、弟の友人が社長をしている水道産業新聞を紹介されます。

社長の河添氏は、彼を編集長として迎えます。

余りの厚遇に驚く黒岩は、「業界紙の経験はあるが、水道となると全くの無知だった。はっきり言って、余り興味を持ってそうになかった。私は素直に、目的は作家になることで、編集長になどという重責に耐えられそうにもない」と、告げます。

これに対し河添氏は、「僕は社員に、自分の好きな道があったなら、何時でもその方面に進んで良い、と話しているんです。今は黒岩さんに紙面を変えて貰いたい、それだけです」と、答えます。

昭和35年、長編「休日の断崖」が第43回直木賞候補になり、続けて下期で「背徳のメス」が直木賞を受けることになりました。

彼は、「禄を食んだけであまり新聞の役に立たなかったのではないか、と今でも河添に詫びる気持ちでいるが、もし少しでも役立つものがあったとすれば、変わった編集長と言う存在価値かもしれない。それは水道産業新聞に対する一部のスポンサーの関心につながるからである。また同社に在任中に直木賞を受賞したこと、新聞の知名度を高める上でほんの僅かだが役に立ったと思う」と、語っています。



白馬三山を背景に、平成9年6月

●淡路大震災での全管連の活躍

ところで、阪神・淡路大震災での全管連の取り組みは、皆さんご承知のところです。

電話連絡もままならない状況の中で、先ず、会長、専務理事が現地へ赴き、支援の検討を行い、そして、神戸災害対策本部と西宮市水道事業管理者の応援要請を受けて、直ちに支援体制を確立しました。

皆さんも思い出していただきたい。給水管復旧工事には、約2ヶ月に渡り協力し、北は北海道から南は九州まで、参画した作業員は延べ約25,000名を数えました。厳しい条件の下で、昼夜を分かたず作業に従事し、神戸市民から大きな拍手と感謝で迎えられ、そして送られたことを。それから8年です。

●長田の街を歩く

私は、日本水道協会の全国総会に参加する機会があり、久しぶりに神戸を訪れました。

時間余裕もあったので、JR鷹取駅から長田駅まで一人で歩きました。菅原市場を中心とした最も被害の大きかった所です。焼け跡はきれいに片付けられ、新しいビルや家が建ち並び、晴れた日も手伝って、どこかニュータウンに来たような錯覚に陥ります。

しかし、ちっちゃな公園に刻まれた震災記録を読めば、心は疼いてしまいます。

8年の経過をどう見るか。

阪神・淡路大震災、昔のことと語るにはまだ早いように思います。



復興なった生田神社にて・左端筆者